

## *Ralstonia solanacearum*による金時草の青枯病

### 1 背景・目的

2009年8月、金沢市北部の中山間地において、金時草に導管の褐変を伴う萎凋症状が発生した。金時草では、ハイイロホソバノメイガ幼虫の根部被害によっても萎凋症状が引き起こされるが、本症状では食痕は確認されず、病害によるものと考えられた。そこで、本症状の原因を究明するため病原の同定を行う。

### 2 技術のポイント

- (1) 葉の表面は光沢を失い株全体が萎凋し、やがて枯死する(図)。導管は褐変し、褐変部を水中に静置すると細菌の漏出が確認できる。
- (2) 細菌を分離し金時草に接種すると萎凋症状が再現されることから、この細菌が萎凋症状の病原菌であると考えられる。
- (3) 細菌学的性質を調査した結果、トマト青枯病菌(学名：*Ralstonia solanacearum*)と性状が一致したことから(表、一部データ省略)、分離細菌を青枯病菌と同定した。



図 金時草の青枯病(仮称)

表 病原細菌の細菌学的性質

調査項目	分離細菌	トマト青枯病菌
グラム反応	—	—
オキシダーゼ活性	+	+
OF試験	酸化型	酸化型
緑色蛍光色素産生	—	—
硝酸塩還元	+	+
ツイーン80加水分解	—	—
グルコース	+	+
フルクトース	—	—
スクロース	+	+
D-酒石酸	—	—

+ : 陽性, — : 陰性

### 3 成果の活用と残された問題点

- (1) 本病が認められる圃場では、収穫時に用いるハサミなどによる作業伝染を防ぐ。
- (2) 本病の被害発生を防止するため、後作には、金時草のほか、ナス科やキク科の作物など、青枯病に罹病性の作物を作付けしない。

問合先：生物資源グループ TEL 076-257-6911  
担当者：安達直人・塚本昇市